

図書館かがわ

香川県立図書館報 第108号

発行日 2015.7.1

Library Kagawa

ISSN 1344-5464



おはなし会にも
たくさんの人が
参加してくれました！

「こども読書まつり」を開催しました。

香川県立図書館では、毎年「こどもの読書週間（4月23日～5月12日）」にあわせて、「こども読書まつり」を開催しています。子どもが本や読書に親しむきっかけとなるおはなし会やかみしばい会のほか、手品ショーや工作教室など、図書館を利用したことのない子も楽しんでもらえるような行事です。

おはなし会では、絵本や紙芝居、手遊びなどを楽しんだほか、伝承手作りおもちゃ教室や、フラワーアレンジメント教室では、子どもと保護者の皆さんと一緒に作品づくりに取り組み、できあがった作品を家族で楽しむ姿が多く見られました。

これからも、本や読書に親しむきっかけとなり、県立図書館を身近に感じていただけるような機会を作っていきたいと思います。



フラワーアレンジメント教室



伝承手作りおもちゃ教室

新任館長あいさつ 愛される図書館を目指して

4月から県立図書館に勤務することになり、もう3ヶ月が過ぎました。

県立図書館が現在の林町に移転して20年が経過しましたが、周りの木々も大きく育ち、静かな環境の中、学習の場、文化活動の場にふさわしい雰囲気が感じられるようになりました。

平成26年度の利用統計を見ますと、県立図書館の入館者数は、年間478,821人（1日平均1,607人）と、全国的にみても非常に多くの県民の方々に利用いただいています。

図書館の職員をはじめ、多くのスタッフは、利用者の皆様に、いつも気持ちよくご利用いただくために、毎日、新聞や雑誌、図書などを整理するとともに、掲示物やチラシの状況等を確認するほか、図書館の周りや閲覧室内を清掃しています。

どうか、利用者の皆さんには、引き続き、県立図書館を愛していただき、素晴らしい図書館に育てていただければと思っています。

今年は、11月中旬から来年2月中旬の予定で、防災設備改修工事を実施することになりました。利用者の皆様には、大変ご不便をおかけすることになりますが、工事期間中もできる限りのサービスを行うとともに、工事終了後には、より質の高い図書館サービスを実施できるように努めてまいりますので、ご理解とご協力をよろしくお願い致します。

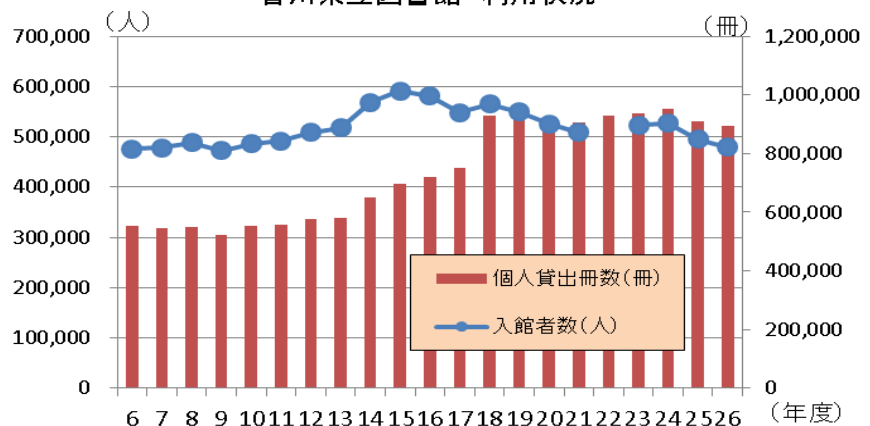
香川県立図書館長 西村隆史

平成26年度 香川県立図書館の統計データがまとまりました！

	開館日数	入館者数(人)		*個人貸出(冊)	
		合計	1日平均	合計	1日平均
平成26年度	298	478,821	1,607	893,122	2,997
平成25年度	297	495,394	1,668	908,623	3,059
増減	1	▲ 16,573	▲ 61	▲ 15,501	▲ 62

*団体貸出と図書館への貸出を除いた、個人の利用者への貸出冊数

香川県立図書館 利用状況



*平成22年度の入館者数は、機器の故障により未測定

県立図書館は、平成6年3月28日に林町に開館して、昨年、20周年を迎えました。右図は、開館から、昨年度までの利用状況のグラフです。

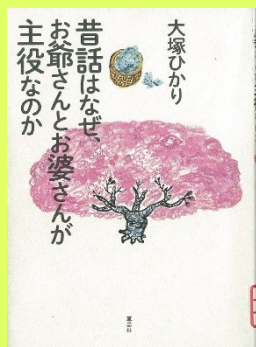
県立図書館は、今年度も、蔵書の充実や、さまざまな行事を予定しています。どうぞご利用ください！

※詳しい統計データは香川県立図書館ホームページをご覧ください。 <http://www.library.pref.kagawa.lg.jp/>

この本オススメです！

～図書館の本棚からピックアップ～

「昔話はなぜ、お爺さんとお婆さんが主役なのか」
大塚ひかり／著（草思社） 2015. 3
（請求記号：38810／07）



「むかしむかし、
あるところに・・・」

なぜ昔話にはいつもお爺さんとお婆さんが出てくるのか、疑問に思ったことがある人は多いのではないのでしょうか？ この本は昔の老人の生活を検証しながら、この謎について考察しています。

私たちは、漠然と、昔の老人は、子や孫に敬われ、隠居生活を楽しめたというイメージを持っていますが、この本を読むと昔話に登場する老人像は、子や孫はおらず、貧乏で、老いてなお働かねばならず、子や孫がいても「姥捨て山」のように冷遇されることも多いということに気づかされます。健全な老人は尊敬・愛着の対象となるが、特に年金等の福祉制度がない未開社会において、心身が衰えた老人は「社会のお荷物」になってしまっていたのではないかなと言うわけです。

作者は、昔話のモチーフとして老人が多用された理由として、「社会的地位の低さ」と「老人そのものがもつ物語性」の2つを挙げています。「社会的地位の低さ」は、貧しい老人が「笠地蔵」のように神の助けで豊かになる、といった逆転劇の面白さを際立たせ、「老人そのものがもつ物語性」とは、長く年を重ねた老人だからこそ「キャラクターが立っている」ので、「いいお爺さんと悪いお爺さん」といった極端な善悪を表現でき、物語を面白くするのではないかと書かれています。

超高齢社会と言われる今日にも通じるテーマを持った一冊です。

「子どもはみんな問題児。」
中川李枝子／著（新潮社）2015. 3
（請求記号：5990／N27）



「子どもは子ども
らしいのがいちばん」

私だけかもしれませんが、小さい子どもを育てていると、いろいろな場面で、うちの子大丈夫かな……と思うことがあります。そんな親を安心させてくれる一冊です。

著者は、おなじみの絵本『ぐりとぐら』を書いた中川李枝子さん。中川さんが若い時に十七年間、保母（今で言う保育士）として働いていたのをご存知でしょうか。この本には、保母・作家・母としての経験から生まれた、幼児を育てているお母さんに伝えたい、45のメッセージが書かれています。内容は子どもの本質、子育ての基本、子どもの読書についてですが、一番中心にあるのは、「子どもは子どもらしいのがいちばん」ということだと思います。

著者によれば、子どもというのは欠点だらけで、自分なりにいい子になっていこうと悪戦苦闘しています。たいがい鼻水や涙で汚れていて、お母さんが大好き。そして正直で、いたずらやけんかをするにも全力投球。そんな子どもは大人から見ると、問題児かもしれないけれど、だからこそかわいい、と言ってくれています。

やんちゃな子どもにおおらかな気持ちで向き合いたい方、子どもを預けることに不安感を持っている方には、特におすすめです。子どもをとことん肯定し、保育園でいきいきと過ごす子どもたちを面白く描いているので、きっと勇気づけられますよ。

